

日本スポーツ界の恩人 F. H. ブラウン

大 野 武 治

**F. H. Brown, A Great Benefactor  
of the Japanese Sports World**

**Takeharu Ohno**

**Abstract**

Franklin. H. Brown (1882-1973) of the American Y. M. C. A. was invited by the Japanese Y. M. C. A. in 1912 to become its sports director. It was the time when the modern sport was just being introduced to Japan. For seventeen years after assuming his position, he continued to make contributions to and make innovations in the Japanese sports world.

His achievement was especially remarkable in popularizing basketball and volleyball in Japan and training players. He also played an important role in training the Japanese team for the Far Eastern Games and the Olympic Games. In 1930, he was finally decorated for all the contributions and achievements he had made.

In spite of all his achievements, the details of his initial visit to Japan and his work are not very well known.

The purpose of this paper is to renew appreciation of his great work by tracing the path of his activities.

Received Apr. 15, 1992

Key words : The modern sport, Y. M. C. A., Basketball, Volleyball, The Far Eastern Games, The Olympic Games.

**緒 言**

ブラウン F. H. Brown は、日本YMCAの強い要請で、北米YMCAから日本のYMCAの体育主事として、1913（大正2）年、31才のとき、エディス（Edith）夫人とともに来日した。

それから1930（大正19）年に至る17年間、日本に滞在し、日本のYMCAの体育事業や日本の体育・スポーツの普及発展に多大の貢献をし、日本のスポーツの基礎を築いた。いわば日本スポーツ界育ての親といっても過言ではない。

同氏はアメリカのシカゴYMCAカレッジ（現在のジョージ・ウィリアムズ・カレッジ—YMCAの体育主事の養成を目指して創立）を卒業し、体育主事としては約10年の経験をもち、シカゴ市公園局のレクリエーション指導も行なったことがあるといわれる。

バスケットボールやバレーボールはもとより、当時の最新の体育・スポーツのエキスパートであり、また人間的にも抱擁力のあるリーダーシップの持主であったと、氏のかつての教え子は語っている。

同氏は日本全国のYMCAの体育事業に精力を傾注したが、特にその一環として東京YMCAにわが国初めての室内体育館の建設に協力し、1917（大正6）年にその体育館の完成をなしとげた。

この室内体育館で、バレーボールやバスケットボール、器械体操などの室内競技の指導に当たるとともに、日本人体育主事の養成に努められた。

また、極東オリンピック大会や国際オリンピック大会においても、同氏の指導的役割は大きく、日本スポーツ界に果たした功績は誠に顕著であり、その功績により、1930（昭和5）年叙勲の栄に輝き、勲五等瑞宝章を授与されているし、また1960（昭和35）年には、日米修交百年に当り、日米関係功労者298人中のひとりとして顕彰されている。

1930年に帰米後はカリフォルニア州ワトソン・ビルで、教会の奉仕活動などを続けながら静かな余生を送っておられたが、1973（昭和48）年の7月11日、エディス夫人に看とられながら、93才の生涯を閉じられた。

以下、同氏が日本の近代スポーツ黎明期において果たされた業績について論及したい。

## 1 東京YMCA体育主事として来日

日本YMCAは、1880（明治13）年開設以来、体育とレクリエーション活動を普及させるため十分な検討を加えており、例えば、大阪YMCAでは、1886（明治19）年の初旬、布教活動と共に体育の必要性を感じて体育活動グループが組織され（これが社会体育のはじめといわれる）、また1905（明治38）年、日本のYMCAの会員であり、「世界スポーツ百科辞典」の著者である松浦氏もスポーツの振興について書いたエッセイの中で、健康的なスポーツやレクリエーション活動の普及の必要性を述べ、スポーツを奨励することが、その当時叫ばれていた単なる禁酒運動よりも、ずっと有効なモラルの改善策であると主張している。

また、東京YMCAの二代目総主事であった山本邦之助は、早くからYMCAを通じて日本の青少年に近代スポーツを紹介すべきであると主張し、1907（明治40）年、アメリカのYMCAを視察して帰えると直ちに東京YMCAに完備した室内体育館を1日も早く開設する

日本スポーツ界の恩人 F. H. ブラウン

よう力説している。

というのは、アメリカYMCAでは、布教活動だけでなく、体育事業にも力を注ぎ、立派な体育館をもっていた。

アメリカ視察を通じて、同氏に強く影響を与えたのはアメリカYMCAの体育理念であろうと考えられる。

YMCAで体育を重視することは、永い伝統であるが、アメリカのYMCAの体育理念は、競技、競争を目的としないで、全人的発達の手段として楽しむスポーツや社会性育成のための体育をモットーに推進されてきた。

このアメリカのYMCAの体育に思想と哲学を与えたのは、アメリカにおけるスポーツ教育の先駆者であるギュリック L. H. Gulick (1865~1918) であるといわれている。

同氏は体育・スポーツを競技としてではなく、全人的発達の一環としてとらえ、身体的機能の発達を精神や知性との関連で考察した。

YMCAの逆三角形のマークは、ギュリック自身の考案によるものであるが、知育、徳育、体育による全人教育を象徴したもので、ギュリックの体育の理念を表現している。

以上のようなアメリカのYMCAの体育理念に基づいた体育事情を見聞した山本氏は、青少年にスポーツやレクリエーションの必要性和それらが行なえる室内体育館をぜひ開設するよう主張したわけであるが、残念ながら理事会では賛成が得られなかったといわれる。

YMCAのリーダー達ですら、体育館建設に消極的であり、青い空の下でこそ、体育はより有効なものになるというような発想があったほどで、YMCAにおける体育活動の重要性には、ほとんど気づいていなかった。

しかし、1912（大正2）年、開催された日本YMCA同盟総会において、体育事業の発展が早急に必要であるということで体育指導者の養成と体育施設の増設がとりあげられ、体育事業の振興を決議したのである。

その結果、YMCAの体育指導者として有能な人材を採用していくことを決め、それが北米YMCAへの体育主事派遣の要請となったわけである。

そこで、フィッシャー Galen M. Fisher が、1913年帰米するとき、アメリカの優秀な体育指導者をスカウトするよう、日本YMCAから要請を受けたのである。

その結果、ブラウンが選ばれ、わが国の新しい体育事業開発の使命を帯び、アメリカYMCA国際委員会より派遣され、来日することになったといわれる。

## 2 日本YMCA体育事業の振興と体育活動

北米YMCA国際委員会が、体育の専門家としてブラウン F. H. Brown を採用し、日本のYMCA体育事業の普及発展のため派遣され、同氏が来日したのは、1913（大正2）年の10月であった。

同氏は、まず日本語の勉強を始めると共に日本のYMCAの体育事業の実状調査に着手した。

同氏の手記によれば、日本の大都市におけるYMCAの活動状況は、おおむね、次のようであったといわれる。

東京には、教育や社会活動、宗教活動などにあてられた場所には、煉瓦造りの建物がひとつしかなく大講堂付きの会館はあったが、体育館はなかった。その裏は空き地であったが、そこが体育館建設予定場所であった。

横浜や名古屋にも、スポーツのできるような建物はなかった。

京都には、小さな練習場のあるコンクリート製の建物があり、そこでは、主としてバスケットボールや柔道、剣道が行なわれていたが、指導者はいなかった。

大阪には、講堂付きの古い木造の建物があったが、体育活動が行なえるような余地はなかった。

神戸には、当時としてはかなり立派な練習場のある比較的新しい建物があったが、その練習場には、バスケットボールのゴール以外はなにも体育設備はなかった。

長崎には、体育設備やレクリエーション設備などは、なにもなかった。

また、日本YMCAの総本部の近くに、中国学生協会の木造の建物があったが、そこには、講堂や練習場として使用できるホールがあり、バスケットボールやバレーボールが遊び程度で行なわれていた。

以上のような実状であったといわれる。

同氏の来日前に、日本でも、男子の間では、いくつかの西洋のスポーツ例えば野球、庭球（テニス）、籠球（バスケットボール）、蹴球（サッカー）、陸上競技、ラ式蹴球（ラグビー）、卓球、漕艇（ボート）、スキーなどがある程度人気を博していた。

それらほとんどのスポーツは、明治の初期以降、外国から来日した宣教師や学校教師、政府の役人などによって導入紹介されたものであった。

また、多くの大学では、野外運動の日（field day）を設けていたし、トラックやフィールド競技の対校戦を行なっていたが、その技術や練習方法などは誠にお粗末なものであり、搖籃時代のスポーツの感があった。

一方、ブラウンが来日した直後の1913年の秋、同氏は東京の陸軍戸山学校のグラウンドで行なわれた日本体育協会主催の第1回全日本陸上競技大会に招待されたが、この大会の模様を、次のように記している。

「走高跳の最高記録は、たしか4フィート11インチぐらいであった。ほとんどの走者は地下足袋を履いていて、クラウチング・スタートはまだされていなかった」などと。

同氏は、この大会のとき、初めて当時の日本体育協会々長嘉納治五郎に会って、その知遇を得るようになったといわれる。

日本スポーツ界の恩人 F. H. ブラウン

ブラウンは、若い頃、陸上競技の選手の経験はなかったが、大学で、コーチングの方法を修得していたので、その経歴が認められ、体育協会主催の陸上競技練習会にも指導員として招かれている。

また、同氏が来日して早々に、日本のスポーツ界のトップ指導者東京高師の野口源三郎、日本体育協会々長平沼亮三、岸 清一らと親しく交流を深め、わが国のスポーツ界の将来についても語り合い、その発展に盡くす決意を固められたといわれる。

1915年の春から1916年の夏まで、ブラウンは、京都、大阪、神戸の3つのYMCAの要請により、東京から住居を神戸に移し、神戸YMCAを拠点に、その体育プログラムの強化、振興のため、京都、大阪、神戸の3YMCAを巡回し、バレーボールやバスケットボールを関西地区のYMCAで指導に当たった。

その数ヶ月後には、神戸の体育館で日本最初の京都、大阪、神戸3都市対抗バスケットボールとバレーボールの試合が行なわれ、試合の結果は、バスケットボール、バレーボールの両方とも京都が勝利を収めたといわれる。

その間、バレーボールを初めて正式に採用した神戸高商の指導にも当たったとか。

因みに、神戸高商は、バレーボールを大学のスポーツとして採り入れた最初の教育機関で、その陰には、当時の体育教官であった岡田、多田両氏の多大の盡力があつたことも見逃せない。

従って、神戸高商チームからは多くの優秀な選手や指導者が、日本のバレーボール界に送り出されている。

前述のバスケットボールやバレーボールがYMCAを通じて日本に紹介されたことは周知の通りであるが、バスケットボールは、1908（明治41）年、大森兵蔵〔アメリカのスプリングフィールド・カレッジの第1回卒業生で、東京YMCAの初代体育主事となった人で、1912（大正2）年、第5回オリンピック（ストックホルム）大会のとき、日本選手団の監督を務め、その帰途、アメリカで、37才の若さで生涯を閉じた〕が紹介したといわれるが、実際に普及させたのは、ブラウン F. H. Brown であるし、東京YMCAに体育館がなかったもので、屋外で会員たちにバスケットボールを紹介、更に日本女子大学でも指導したといわれる。

バレーボールも、同年、大森兵蔵によって東京YMCAの新設された屋外運動場で、最初にその競技方法を紹介したといわれるが、このバレーボールもバスケットボールと同様に、その紹介と指導に本格的に力を注ぎ、国民的スポーツとして、日本バレーボール界の今日の普及発展の基礎を築いてくれたのはやはり、ブラウン F. H. Brown であるというのが、今日の定説となっている。

すなわち、同氏は、1913年来日し、まず東京中華YMCAで、このバレーボールを紹介、自らも実演し、指導したといわれる。

因みに、このブラウンの紹介したバレーボールは、ローテーションなしの21点ゲームの16人制であったといわれる。

また、同氏は、1915年6月、東京の日比谷公園の広場でも実演し、広く紹介したが、そのときの模様を当時の毎日新聞では、次のように記している。

「此の競技、中央に網を張り、小型の球を身体と手のみにて送り合い、勝負を決するものなり」

当時、ブラウンは、わが国の現状を見て、国土が狭く、体育施設が貧弱であったので、多人数で、簡単に楽しめる方法で、このバレーボールを伝えたといわれる。

当時、男子の間では、いろいろなスポーツが行なわれていたが、このバレーボールを最初に見学した体育指導者は、運動量、人数、ネットによる区分などの点から、女子向きの教材であり、女子のスポーツというイメージを抱いたといわれる。

続いて、1915（大正4）年、ブラウンは、このバレーボールを京都、大阪、神戸のYMCAにも伝え、また神戸高商にも指導したので、関西方面で盛んに行なわれるようになった。

更に、1917（大正6）年、ブラウン F. H. Brown の盡力により、東京の芝浦で、第3回極東選手権大会が開催されることになったが、当時、わが国にはYMCA以外に、バスケットボールのチームはなかったので、同氏は、大会出場を熱心にすすめ、結局、京都、神戸の両YMCA間で代表決定戦を行ない、佐藤金一がキャプテンである京都YMCAが勝って大会に出場したといわれている。

一方、バレーボールも日本代表として東京、大阪、京都、神戸の各YMCAと神戸高商の学生で、臨時に選抜チームを編成したが、日本チームには、バレーボールの専門の選手がひとりもおらず、バスケットボールや陸上競技の選手が兼ねていたといわれる。

従って、選手たちは競技規則も十分に理解しておらず、前日の説明で、やっとのみこんで試合に出場するありさまで、作戦を立てるどころではなく、相手のボールはとにかく一発で返してしまえというような全く幼稚なものであったといわれる。

勿論、試合の結果は惨敗に終わったが、選手たちは、この大会を通じ、貴重な体験をした。これを機に、競技としてのバレーボールが急速に注目を浴びるようになり、全国各地のYMCAを中心として多数のチームが結成され、交流試合も活発に行なわれるようになった。

当時の資料によると、前述の第3回極東大会には、中国、フィリッピン、日本の3ヶ国が参加したが、このときのネットの高さは、2.28m、コートのはりさは現在の9人制の男子よりも、かなり大きく、27m×13.5m で、4人が4列に並んでプレーする16人制であったといわれる。

一方、1917年に、東京YMCAに体育館が完成するや、ブラウン F. H. Brown は、この体育館でバスケットボールの指導を行ない、その結果、東京YMCAのバスケットボールは飛躍的に向上したといわれる。

日本スポーツ界の恩人 F. H. ブラウン

このようなスポーツの急速な発展を更に広げるために、1917年、アメリカの Wichita の Y M C A 体育指導者であったスコット・ライアン (W. Scott Ryan) をアメリカから日本に招き、ブラウンと協力し、スポーツやフォーク・ダンスを教えたり、体育指導者の養成に力を注いだということも見逃せない。

上述の通り、バスケットボールやバレーボールなどが、日本に伝来した当初は、Y M C A の中だけで行なわれていた。

従って、前述の第3回極東大会では、バスケットボールの日本代表チームは、京都の Y M C A チームであり、また、バレーボールの日本代表チームも、いくつかの Y M C A チームからの選抜チームであった。

このように、Y M C A のメンバーたちが、いろいろなスポーツの大会で活躍し、貢献したことは特筆すべきであろう。

### 3 日本最初の室内総合体育館の完成と体育活動

ブラウン F. H. Brown のこの体育館での体育活動に論及する前に、まず最初に、この体育館は、日本最初の記念すべき室内総合体育館でもあるので、その完成に至る経緯について紹介しておこう。

すなわち、1917 (大正6) 年10月に東京 Y M C A (東京の神田美土代町) に、日本最初の立派な室内総合体育館、室内温水プールが完成し、近代スポーツの普及発展に大きく貢献したわけであるが、この1917年は日本の Y M C A のみならず、日本の体育史上においても、記念すべき年であろう。

特に、室内プールができたことは、日本水泳界の国際化、近代化に果たした役割は大きく、クロール泳法は、このプールで初めて行なわれ、普及していったといわれる。

この体育館建設については、前述の通り、当時の Y M C A 総主事山本邦之助の盡力によるところが大きであった。

同氏は、1907 (明治40) 年、北米 Y M C A を視察した際、あちらの運動競技について、その奨励の方法や室内運動が学生や一般の人々の間でも盛んに行なわれ、それがアメリカの実業家の活動の源泉になっている実状を見聞し、日本にも、ぜひスポーツや運動を奨励しなければならないと主張し、翌1908 (明治41) 年、東京 Y M C A の敷地内に野外運動場をつくって、バスケットボールやバレーボールのコートを設備した。

この業務を大森兵蔵に依頼すると共に、アメリカの名譽主事デービスらと協力して新しい運動を開始する機運を促した。

丁度、この Y M C A 体育部の開設に当たって、アメリカのシカゴのスプリング・フィールド・カレッジを卒業したブラウン F. H. Brown の来日 (1912年) があり、次いで、1917年、ライアン W. Scott Ryan が来日して大いに室内運動のために盡くされた。

この体育館を建設する際は、ずいぶん東京YMCAの理事者の間でも異論があったといわれる。

例えば、青年は早起きさせ、電車に乗らず歩いた方がよいとか、夜間での室内の運動は空気がよくない、戸外の新鮮な空気を吸い、日光を浴びて運動をした方がよいなどの異論があったといわれる。

しかし、1912年の日本YMCAの総会で、体育事業の振興が決議され、その一環として体育指導者の養成と体育館など体育施設の増設をとりあげ、スポーツやレクリエーション奨励のため、体育館を建設する運びとなったわけである。

かくして、完成した体育館は、3階建てのコンクリートビルで、十分な設備をもった体育館や室内温水プールを備えた日本における最初の建物といわれ、なお、スプリング床の柔道室やロッカー・ルーム、浴室なども設備されていたといわれる。資料によると、この室内総合体育館は、その当時としては、巨額の建設費8万円、器具、設備費2万円を投じて建設されたともいわれる立派なものであった。

特に、東京YMCAの室内プールは、クロールやその他の近代的な泳法を練習することのできる日本での最初の記念すべき場所となった。

因みに、そのクロールその他の泳法の導入については、ブラウン F. H. Brown の指導努力が大であったといわれる。

とにかく、このプールが完成したことは、当時の水泳界にとって寄与するところが大きく、日本水泳界の国際的な躍進に大きな役割を演じたといわなければならない。

また、この体育館は非常に頑丈な建物であったので、1923（大正12）年に起きた関東大震災の際には、建物の内部は火災によって焼失してしまったが、建物は崩れなかったため、近所の人たちの避難場所として大いに役立ったということである。

ブラウン F. H. Brown は、新築されたばかりの、この東京YMCAの体育館で、1930（昭和5）年、帰米するまで、その当時、日本の国内ではほとんど知られていなかったバスケットボールやバレーボール、室内水泳などを指導すると共に学校の体育部にも、新しい技術を手ほどきし、わが国の近代スポーツの基礎を築いたといえよう。

ついでに、このブラウンのよき協力者として、わが国スポーツ界の恩人であり、忘れてならない人物のひとりである、スコット・ライアン W. Scott Ryan を紹介しておきたい。

このライアンは、ブラウンと同様、北米YMCA同盟から派遣されて、1917年から1929年まで、日本各地のYMCAを巡回して競技の指導に当たったが、同氏は、特に鉄棒、平行棒、水泳、フォーク・ダンスが得意で、ブラウンと共にバスケットボールやバレーボール、更に体育館に備え付けられた新しい運動器具の正しい使用法の指導や体づくりを目的とした基礎体操などにも力を注いだといわれる。

また、1921年の秋、この体育館を中心として、3ヶ月に亘り、日本YMCA同盟主催の第



日本スポーツ界の恩人 F. H. ブラウン

1回体育指導者講習会が開催されたときには、このライオンはブラウン、野口源三郎（東京高師）らと、その講師陣に加わり、理論講義を担当したといわれる。

この講習会は、翌年の1922年の春にも開催され、その後は、ブラウンの指導のもとに、各地のYMCA主催で、地元の中学、高校の教員を対象にして行なわれた。

この体育館は、1923年の関東大震災により焼失し、その修理と拡張を行なったが、その際にも、ブラウンの助言指導が大きかったといわれる。

#### 4 極東選手権競技大会とオリンピック大会で果たした指導的役割

まず、極東大会であるが、この大会は、第1回（1914—マニラ）から第10回（1934—マニラ）まで続き、日本、フィリピン、中国（当時の中華民国）の3ヶ国によって運営され、交互に大会を主催するいわゆる輪番制で開催された。

その中心となって盡力したのが、2人のブラウンである。

そのひとり、フランクリン・ブラウン F. H. Brown であり、もうひとり、エルウッド・ブラウン E. S. Brown である。

後者のブラウンは、この大会の発案者でもある。

この2人のブラウンは、1915（大正4）年の第2回大会（上海）で、初めて顔を合わせ、それ以来、大会のため協力する、よきパートナーとなった。

1917（大正6）年の5月、第3回極東大会が東京の芝浦グラウンドで開催されたが、それまでは、このような国際大会は、日本では開催されたことはなかった。

1915（大正4）年の上海での第2回大会の後、フィリピンのブラウン E. S. Brown とブラウン F. H. Brown の両氏は、第3回極東大会の開催に向けて、その当時IOCのメンバーであり、日本アマチュア体育協会（JAAA—Japan Amateur Athletic Association）の会長嘉納治五郎に協力を要請し、日本が極東体育協会のメンバーとして参加することと、大会を開催するに当たって、多くのアジア諸国を招待するよう要請した。

しかし、嘉納は、この第3回大会の主催には、当初、あまり積極的には賛成しなかったといわれる。

その主な理由としては、日本はまだ、このような大きな国際競技会を主催した経験がなく、その運営に当る人物とか助言を与えられるほどの経験をもった人物がいないということ、また参加各国の参加費で大会の準備や運営にかかる多大の費用を賄うことは、到底無理であり、多くの赤字を抱え込んでしまうのではないかなどが挙げられた。

これに対し、E. S. ブラウンは、日本のYMCAには、それに当たり得るF. H. ブラウンという人物がおり、もし要請があれば、氏を日本体育協会の技術顧問として提供する用意があると申し出て、運営面の問題はこれで解決の見通しが立ち、一方の資金面での問題では、村山朝日新聞社々長や本山毎日新聞社々長の応援も願い、朝吹常吉（三越デパート）、林

愛作（帝国ホテル支配人）、YMCAのフィッシャー Galen M. Fisher が、資金調達を約束してくれたこと、更に岸清一が財務監督として加わり一応解決する目途がつき、ようやく第3回東京大会が実現する運びとなった。

このように、運営面や資金面での諸問題について、不安や心配を抱きながらも、大会の開催に踏み切ったが、結果的には、この大会は大成功を収め、日本も初めて国際競技大会を主催する貴重な経験と自信をもつことができた。更にこの大会を契機に今後の国際大会への参加に向けて、記念すべき第1歩を印したということができる。

因みに、バレーボールが、わが国に公式に競技として紹介されたのは、この大会からであるといわれる。

また、この大会を契機に、日本体育協会も極東競技協会に正式に加入することになった。

その後、日本で行なわれた極東大会は、第6回（1923—大阪築港）、第9回（1930—明治神宮外苑）の2回であるが、回を重ねる毎に、わが国の競技水準も向上してきた。その全期間を通じて、F. H. ブラウンは、大会の運営面や行政面にわたり、3ヶ国間の折衝、各種目の指導、連絡に重要な役割を果たしたといわれる。

なお、F. H. ブラウンは、第3、6、9回の極東大会では、大会委員をも務めた。

次に、この極東大会にまつわる裏話を、2、3紹介してみよう。

(1) 第3回極東大会に、バスケットボールの日本代表を参加させるについて、当時は、この競技を知る者は極めて少数であったり、バスケットボールやバレーボールは室内遊戯のようなものであるから、大会の競技種目の中に入れてない方がよいというような世論も強かった。このような状態で、1部の人たちによって練習が続けられていたので、代表チームの予選なども、事実上できない状態であった。

そこで、F. H. ブラウンが主として代表チーム編成の折衝に当たった結果、当時としては比較的まとまっていた京都YMCAチームを日本代表に推せんしたといわれる。

このチームのキャプテンは、佐藤金一（アメリカのウィスコンシン大学卒で、同大学チームの選手を務め、後に八高教授となる）で、アメリカの大学チームのメンバーとして本場仕込みの技能は抜群で、フィリピンや中国チームの選手にくらべても劣らなかったといわれる。

試合の結果は、中国チーム35—16日本、比39—14日本であるが、幼稚な技術の割には善戦したといわれる。

わが国における本格的なバスケットボールの試合は、恐らく、この第3回大会が最初であるが、この大会が国外的には国際バスケットボール界への進出と国内的にも、この競技の普及発展につながる契機となった。

(2) 第5回極東大会（1921—上海）では、日本からバレーボールの代表を参加させるかどうかについて、大日本体育協会内においては、選手派遣費など問題があって消極説が有力であっ

日本スポーツ界の恩人 F. H. ブラウン

たが、F. H. ブラウンや近藤茂吉らの切なる勧めもあって、遂に選手を派遣することになったいきさつもある。

結局、日本の排球（バレーボール）代表チームは東京YMCAチームが選ばれたが、このチームの大半は、バスケットボール選手で占められ、バレーボール専門選手はいなかった。なお、この大会から12人制となった。

また、この大会に出場した日本チームは、試合当日、雨に濡れた屋外の芝生コートは滑りやすかったせいもあってか、「わらじ」を履いて出場、またフィリピンチームは、「はだし」で出場したとかのエピソードがある。試合の結果は、比チーム2  $\left\{ \begin{matrix} 21-4 \\ 21-0 \end{matrix} \right\}$  0日本チーム惨敗であった。

次に、オリンピック大会に関連して、F. H. ブラウンは、1920年のアントワープ(Antwerp)大会では、トラック・コーチとして日本代表選手団に同行、また1924年のパリ(Paris)大会では、技術指導員、1928年のアムステルダム(Amsterdam)大会では、日本代表団の技術顧問として参加し、活躍された。

## 5 体育指導員の養成

YMCAが日本のスポーツ界に貢献した事柄のひとつとして、日本YMCAチームが体育活動やレクリエーション活動のリーダーを養成するコースを設計、実施したことが挙げられる。

F. H. ブラウンは、氏の経験からYMCAの体育学校を組織することが、リーダーシップを育てるために最も重要であると考えた。

この意見は、YMCAの日本委員会の委員や信徒団体の幹事たちにも承認され、YMCA国際委員会ニューヨーク支部から財政面の援助も受けられるという仮の同意を得ていたのにも関わらず、この学校設定の計画は不可解な理由で廃止されてしまった。

しかし、F. H. ブラウンは、YMCA専属の体育指導者を確保するため、有能な人材を見出し、養成し、更により一層磨きをかけるために、それらの人材を海外へ派遣した。

この人材を派遣する計画は、後にすばらしい体育指導者になった人たちによって継承されたが、その中には、柳田 亨や廣田兼敏らも含まれる。

この柳田 亨は、F. H. ブラウンの指導のもと、体操チームに所属していたが、氏は天性の才能に恵まれていたので、ブラウンによって、デンマークに派遣され、ニールスブックの学校(Niels Bukh's School)に入学、その後、デンマークの体操技術を修得して日本に持ち帰り、それをYMCA会員に紹介し、また学校の教員のためにも、体操の講習会を開いたといわれる。

F. H. ブラウンは、主として球技を教え、W. S. ライアンは、体操とフォーク・ダン

スを教えたが、そのフォーク・ダンスは、大変人気を博し、特に、学校の先生たちに注目を集めたといわれる。

## 6 F. H. ブラウンの功績に対する感謝の集い

F. H. ブラウンは、18年間にわたる日本での任務を終え、1930（昭和5）年、帰米されたが、F. H. ブラウンの日本における体育・スポーツ活動に対する功績を讃え、それに感謝する集いが、かつての教え子や日本の体育・スポーツの関係者たちによって、1953年と1964年の2回にわたり開かれた。

### (1) 1953（昭和28）年の集い

1953年は、日本YMCA同盟成立50周年の記念の年に当たるので、これを機会に、お世話になったブラウン氏を日本へ招き、めざましい今回の「スポーツ日本」を親しく見てもらい、併せて感謝の意を表したいという趣旨で、平沼亮三を委員長に、1953年9月、歓迎準備委員会が組織され、各界の方々から、その当時の金額にして、約84万円を集め、感謝の集いをもった。

F. H. ブラウンは、1953年の10月9日来日し、11月5日まで日本に滞在したが、23年振りに見る日本の躍進振りに眼を見張りながら、多くの友人と旧交を温め、再会の感謝にひたったということである。

また、この来日の機会に、四国四県で行なわれていた第8回国民体育大会の秋季大会にも出席し、閉会式には、昭和天皇から、ご会釈を賜ったとかで、大変感激したとのことである。

### (2) 1964（昭和39）年の集い

1964年は、東京オリンピック大会開催の記念すべき年であるが、この大会のとき、日本の体育・スポーツ界に盡した功績によって、日本オリンピック組織委員会から「荣誉あるゲスト」として来日した。

氏は、このとき、82才の高齢であったが、やや耳が遠いだけで、大変お元気であったといわれる。

この機会に、教え子たちによる歓迎会が、同年の10月8日午後6時より、東京神田のYMCAにおいて催された。

この歓迎会の当日は、水泳連盟の松沢一鶴、日本バスケットボール協会副会長の浅野延秋やかつての教え子や当時のYMCA職員など、約30名が出席し、懐旧談に花を咲かせながら、なごやかな一時を過したということである。

当時の朝日新聞には、ブラウンの談話として、「元気なみんなに会えて、こんなうれしいことはない。女子バレーなど、日本の強くなったのにはおどろいている。

オリンピックは、ゆっくり見物したい」という記事をのせている。

また、1953年と1964年の2回にわたる招待について、ブラウンは、「この2つの10月は、古

日本スポーツ界の恩人 F. H. ブラウン

い友人と会う喜びに満たされ、私には忘れることのできない月となった」と感激の手記を残している。

以上のように、日本で親交のあった各界の名士や教え子たちによって、2回にわたり感謝の集いもたれたことは、同氏の日本の体育・スポーツ界に残した大きな足跡とその人間的な魅力に負うところが大きいことを如実に物語っていると言っても過言ではない。

#### 引用・参考文献

- (1) 永井三郎, 「F. H. ブラウンを悼む」, 体育の科学 第24巻 第1号 1974.
- (2) 日本体育協会 「最新スポーツ大事典」, 大修館, 1987.
- (3) 大日本体育会, 「大日本体育協会史」, 第一書房, 1946.
- (4) 真行寺朗生, 「近代日本体育史」, 日本体育学会 1928.
- (5) 松平康隆, 豊田 博, 大野武治, 稲山壬子, 島津大宣, 「バレーボールのコーチング」 大修館 1974.
- (6) 岸野雄三, 多和健雄, 「スポーツの技術史」 大修館 1972.
- (7) 朝日新聞, “上達ぶりに驚く” 朝日新聞社 Oct. 9. 1964.